

## 〈書評〉

## 矢部彰著『国語教育の窓』

本書を読んで、まず行間にみなぎる著者の気迫に圧倒された。

本書は、長短十四篇の文章からなるが、その末尾に記された脱稿日付から明らかに、平成五年三月を境にそれ以降、短時日のうちに一気呵成に書き上げられたものである。平成五年三月がどのような日かといえば、それは著者が「生涯一國語教師」の思いで半生を勤め上げた国語教師を辞めた日である。いや、国語教師であることを辞めたというより、国語教師として教育実践の現場を離れた日である。これまで半生をかけて国語教育の実践の場で努力奮闘してきた著者が、その体験を通して学び、考え、さまざまな矛盾に悩み、苦しみながら、自己のうちに確実に血肉化し、蓄積してきた国語教育に関する思いを、本書において怒濤のごとく一気に吐きだしたかのような感がある。それは単に国語教育の問題にとどまらず、教育そのものに対する本源的な問い掛けとなっており、本書の読者に投げ掛けるテーマは非常に重い。

著者の矢部氏は埼玉大学を卒業後、埼玉大学附属中学校の国語教師として七年間、中学校国語教育の実践にたずさわり、若き日

千 葉 俊 二

の理想と教育理念の実現をめざして奮闘、のちに『森鷗外 教育の視座』にまとめられた森鷗外を中心とする日本近代文学の研究にたずさわる一方、早稲田大学大学院の修士課程を修了後、京華学園に就職。折しもそれまで鎖ざしていた中学校課程が再開されることになり、中学・高校六年一貫教育の実践理念にたいする著者の思い入れもあって、その中心的役割を担った。そして平成五年三月、「生涯一國語教師で終わることを考えながら生きていた私は、いつのまにか、私の奉職する私立学校の教育観に懷疑しなければならぬような認識を育ててしまった」といい、五十歳を機に十五年間勤めてきた京華学園を退職し、教育の現場から離れてしまったのである。

最初にいったように、本書はその四半世紀におよぶ国語教師として勤めた間に抱きつづけてきた鬱積を一気に吐露したような感があり、現役の教師であつてはなかなか発言し得ないような現代の学校教育に関して根本的な問題を思い切り書き綴ったものである。著者はその「あとがき」に「私の国語教育の実践のありよう

や国語教育をめぐって思索するところのすべては、この『国語教育の窓』に載せた文章に尽きている。(中略) 国語教育に関するあれこれのすべてを吐き出してしまった私には、大きな空洞ばかりが残されている」といっているが、長年にわたって心のうちにわだかまっていたことをこれほどストレートに語り尽くしては、さぞすっきりしたことであろう。が、今日教育問題に関する発言に多くありがちな日本の現代の教育制度への恨みつらみを連ね、その現状を糾弾し、論者ひとりが間違いないかのように正義者ぶっているわけでは決してない。

例えば、「国語教師を父親に持った子供たち」という副題をもった「二人だけの旅」という文章をみてみよう。ここで著者はさまざまな事情で自身が奉職する中学・高校六年一貫教育を標榜する私立学校に、自分の子供を二人まで入学させ、十年間子供とともに通いつづけた体験、——学校においては「教師」であり、家庭においては「父」であることの困難と矛盾を忌憚のない筆致で描き出している。つまり著者は、ちょうど中学校課程の再開を機に中学・高校六年一貫教育の基礎作りの仕事に生き甲斐を感じ、理想に燃えた教師と、その教育をうける立場にある生徒としての我が子を見守る父親の役割を二つながらに演じてしまったわけである。中学・高校六年一貫教育の実践理念からとも角いい実績をあげたいと願う「教師」の立場から生徒としての我が子を見、「父」として学校のハードなカリキュラムをこなすためにヘトヘトに疲れてしまう我が子を見つづけるという稀有の経験から、いわば複眼的に現代の学校教育制度そのものへの批判的考察を深め

てゆくことになる。自己の挫折体験を赤裸々に語りながら、痛烈な自己批判をまじえて、その過程を綴ってゆく文章は感動的であるとともに、深く考えさせられるものがある。

本書に展開されるのは、こうした体験に根ざし、こうした体験から学んだ国語教育論である。私立中高六年一貫教育の弊害について論じた「花東三つ」は、あるいは現場の教師たちの間ではここに記されているようなことは常識的な事柄に属するのかも知れないが、そのシステムから落ちこぼれた生徒たちが劣等感や挫折感に打ちひしがれ、いかに無気力な状態に陥るかを見事に浮き彫りにしており、私には大きな衝撃だった。ほとんど授業も成立しないようなそうした生徒たちを相手に、著者がどのような国語の授業を展開したか。「私は、KやT、Nだけでなく、暗い顔を見せながら、教室の壁を透視して遠い街角の喧騒に耳を澄ませ、焦点の合わない目を私に向けてくる生徒たちみんなに、できるだけ功利的教育観から遠いところで話しかけるように心がけた。教科書教材を読む時間を短く切り上げ、できるだけ多くの時間を生み出し、新聞のスクラップを印刷して共通の話題にして、現代の日本の社会に生起している事件や現象について語り合う場を作った。現代日本社会に生きることのつらさ、つらいのは教師であり大人である私も同じであること、現代社会がどんなに人間の心をスポイルしてるか、心身に傷を受けた人間はどのような行動に走るのが、(中略) さまざまな人間がそれぞれ違う喜びをもっているのか、(中略) さまざまな人間があること、学歴や地位にとられない生き方が日本の社会にも可能であること、などなどのことを、具体的に、彼

等の生活に近寄せて話し続けた。話の時々、一人一人の生徒に話しかけ、呼びかけ、質問し、からかい、励まし、私の観察した好ましいところをほめ、また、いくつかの注文をつけて、おまえは、こんな生き方ができるんじゃないか、こんな勉強をすると成功しそうだなあ、などと軽口を叩いた」。

その結果どうなったか。生徒たちは、面白そうな話題のときには耳をそばだてて聞き、自分に関心のない話題のときには、すっかりシラケきって、あいかわらず机に突っ伏しているものもあったが、しかし「生徒たちは、なかなか変わろうとはしなかった。だが何よりも変わったのは私であった」という。つまり「教える者」の教師が、逆に「教えられる者」としての生徒、——しかも学校教育のシステムから落ちこぼれてしまったような生徒たちから、「教育の本質を直視すること」を教えられたというのである。もとより教師から教わろうとしない生徒は生徒たり得ないが、また生徒から教わろうとしない教師も教師たり得ず、教育の原点は教える者と教わる者との間の双方向的なコミュニケーションにあるといえよう。「教える」側の論理と「教えられる」側の論理の二つながらに立脚する複眼的教育観を持」たねばならぬという筆者の主張に、私は深い共感をおぼえざるを得ない。

こうした教育観に立脚し、教科書における生徒の実態からかけ離れた教材選定への批判、文学作品を何もしることができないものによって書かれた教師用の指導書なるものへの痛烈な批判などが展開される。その一つ一つは肯綮に当たり、実に説得的である。また長年国語教師として試行錯誤をつづけながら、著者が実

践してきたさまざまな授業に対する創意工夫も紹介される。が、それも高見から見下ろすような書き方ではなく、教えられる生徒の側に立ち、時にはみずからの不明を恥じながらも実に率直に、嫌味なく語られているので、非常に好感をもって読むことができる。実践報告にしる、教材研究にしる、ここにはいささかなりとも机上の空論めいた要素を含まず、ことごとくが生きた教室から発想され、教育の現場で考え抜かれたものといえる。本書が多くの国語教育関係の類書と大きく相違するところである。

著者は五十歳になったのを機に国語教育の現場を離れることにしたが、もちろん国語教育に見切りをつけ、見捨ててしまったわけではない。「私は、これからの人生のどこかで、なんらかの形で、国語教育に関わるであろうことを決意している」(「あとがき」といい、その「具体的なプラン」もないわけではない)ようである。現代日本社会の疲弊した学校制度を超えて、著者がどのような教育を求めようとしているかは、最後におかれた「自己同一性(アイデンティティ)の確立をめざして——『人間』科創設の提言——」「学校教育に求められているもの」の二つの文章を読むことによって、漠然なりとある程度窺い知ることまでできるが、これまでの体験を十全に生かしながら、なんらかのかたちで国語教育界の現状に大きな風穴を開けるような仕事をしてほしいと切に願わずにはおられない。本書は、中学校の国語教師はもとより、教育にたずさわリ、教育ということに多少なりとも関心を抱く人々に是非とも読んでいただきたい一冊である。

(一九九四年七月二〇日 近代文藝社 二五〇〇円)